

消 息

日本社會學會及び日本經濟政策學會

學會大會の開催期は種々なる事情から秋に集中する傾きがあるが、昭和十七年度秋に於いても多數の學會が開かれ、大戰下の學問のあり方が問はれ、或は新しい問題に對する解答が示されたのであつて、既に本欄に紹介記録された學會記事も二三にして止どまらない。

さて社會學會及び經濟政策學會は我が國に於ける諸學會のうちでも極めて重要視さるべきものであつて、大會の内容を簡単に紹介するだけでも相當の素養が必要である。ことに社會學會は報告が多方面に亘つてゐるので、専門外の私には近より難しいものが多く、たとへ消息記事にせよ、これを書くといふことはその任でないのであるが、大會會場が本學であつたといふ偶然の機會から若干の係はりをもつたので筆をとるやうなことに相成つたわけである。誠に不親切な紹介に終るであらうことに對し豫め切に會員及び讀者諸賢の宥恕を乞ひ度い。

消 息

日本社會學會は傳統の古い學會で、今回で既に第十七回目の大會である。都心を離れた不便な場所であつたにも拘はらず、十月三十日九時、本學廿六番教室に多數會員の參集を得て、會長戸田貞三氏司會の下に高島教授が開會の辭を述べられ、引續き研究報告に移つた。當初の豫定では金子教授の『社會學方法論上の具體的普遍主義』と題する報告が行はれる筈であつたところ、都合で中止されたため、残念ながら本學からは一人の報告者をも出さぬ結果となつたのであるが、第一日第二日併せて總數四十五名に上る報告者をもつたことは、本學會の規模の壯大を思はすに充分であらう。

第一日午前

社會學論の部

- (一) 形態社會學の構想 安西 文夫氏
- (二) 社會諸強制の相互關係 桑原 博隆氏
- (三) 技術的社會と呪術的社會 武田 良三氏

一橋論叢 第十一卷 第一號

(四) 文化的遲滯の問題

難波 紋吉氏

(五) 歴史社會學とマックス・ウェーバー

新明 正道氏

こゝでは社會の類型的把握や、社會現象の根本的契機たる強制性、或は社會學の方法の問題が取扱はれ、報告者質問者互に自説を固守して活潑な議論が展開された。但し本學會の恐らくは中心と考へられるこの部會に於いて特に一貫した問題性といつたやうなものを感得しえなかつたのは残念であつた。次にこの部會と併行的に三十六番室では左の四つの宗教道德に關する報告があつた。

宗教道德の部

(一) 再び佛教々國の分離及び結合について 岩井 龍海氏

(二) 回教社會に於ける血縁關係の問題 小口 偉一氏

(三) 我國に於けるカルヴェニズムの發展 高谷 道男氏

(四) 宗教講の問題 内藤 莞爾氏

以上で午前の報告を終へ、續いて午後の日程に入るのであるが、その前に會員一同學長招待午餐會に出席、金子教授より挨拶あり、また他方食後の一刻をメンガー及びギールケ文庫の展覽場に足を運んだ。

第一日午後

人口職業の部

(一) 鍊成の本質

今田竹千代氏

(二) 勤勞青年調査

志村庄太郎氏

(三) 我國に於ける年齢集團に就て

志村 義雄氏

(四) 學生生活調査

西野入 徳氏

(五) 半島人に對する經營同化段階の性格

三好豐太郎氏

この部會に於いては主として戦時下の學生及び勤勞青年の生熊が學校當局の調査や大日本青少年團の研究によつて明瞭にされ、將來の青年層指導に對する興味ある示唆も含まれてゐた。この部會と平行的に他方では政治經濟の部が開かれて次の諸報告がなされた。

政治經濟の部

(一) 國家・國威・國憲の概念と聯關

岩崎 卯一氏

(二) 大東亞共榮圈と國際政治

大石兵太郎氏

(三) 所得ピラミッドの形成より見たる社會發展の動向

早川三代治氏

(四) 城隍

増田福太郎氏

(五) 暗示と政治

川邊喜三郎氏

こゝでの報告は文字通り政治及び經濟に關する『社會學的』取扱ひである。但し城隍は北中支を主とする一種の民間信仰の研究であつた。

以上の各部會が滞りなく終了して、大會の舞臺は國立から神田に移る。即ちその夜學士會館に總會が開かれ、會務の報告に續いて列席諸氏の挨拶が交換され、第十八回大會を海峽の向ふ側の京城にもつて行くことなどが決定を見、翌三十一日の大會第二日は如水會に於ける二つの研究報告會に始つて、夜の特別報告討論會まで全てプログラム通り進行していつたのである。以下は、紙面と私個人の都合から、報告者及び題目を紹介するに止どめる。

第二日午前

社會意識の部

- (一) 日本世界觀の構想 川上 賢叟氏
- (二) 義理の觀念とその社會的基礎 姫岡 勤氏
- (三) 第一次大戰に於ける英國の對獨前線宣傳について 三崎 敦氏
- (四) 全體主義の生成 湯村 榮一氏
- (五) 藩風 綿貫 哲雄氏

消 息

農村都市の部

(一) 南韓農村調査報告

秋葉隆氏・鈴木榮太郎氏

(二) 本邦農村に於ける勞働移動 特に出稼事象に關する研究

池田 善長氏

(三) 農村宗教の特質

井森 陸平氏

(四) 講集團の組織形態

竹内 利長氏

(五) 福岡縣宗像郡の宮座に就いて

中井 虎一氏

(六) 社會的適應としての都市化の 現象について

松浦 孝作氏

第二日午後

家族民族の部

- (一) 華北農村の通婚圈 伊藤 章氏
 - (二) 東印度に於ける Regent の地位に就て 川又 昇氏
 - (三) 朝鮮の村落に於ける宗族結合の一事例 申 鎮 均氏
 - (四) 民族同化の社會學的過程 早瀬 利雄氏
 - (五) 近世支那に於ける宗教の移住と發生 小松堅太郎氏
- 民族の問題については遙々朝鮮及び北京から上京の報告者もあり、共榮圈の確立に對する社會學者の寄與は高く評價さるべきであらう。同じ意圖から本大會では『東亞諸民族の性格』を

一 橋 論 叢 第十一卷 第一號

主題とする特別討論會が開催され、一般人士の聴講をも許して、夜六時から四名の參加報告者の熱心な報告が行はれ、東亞民族の歴史的地理的文化的特質を祖上にのせた。報告内容は次の通りである。

- (一) 挨拶 戸田 貞三氏
- (二) アジア大陸の地勢と民族 中村良之助氏
- (三) オロチオン族の社會と文化 秋葉 隆氏
- (四) 民族として華僑 井出季和太氏
- (五) スマトラの母權的社會 宇野 圓空氏

かくして兩日に亘る第十七回大會は文字通り豊富な、しかしやゝ百科全書派的に彩られた收穫を残して、終幕した。何れ報告及び質疑應答は同學會の年報に收録發刊の豫定である。はじめに宥恕を乞ふたやうに茲にはプログラムの引寫しを以て責を果させて頂く。

× × ×
 扱て次に日本經濟政策學會は、右より約一ヶ月を経た十一月二十二、二十三の兩日に、東京帝國大學經濟學部に第三回大會を開催した。本學會の成立したのは昭和十五年で、社會學會ほどの歴史をもたない。そして學會創立の事情も社會學會とかな

り趣きを異にするのではないかと思ふ。經濟政策學會とても直接實踐に參加することを目的とするものではないがしかし當時すでに支那事變第四年を迎へて戦時經濟の諸問題がやうやく銳角的に全貌を露呈し經濟政策の當否が日本の運命を左右するに至つた現實情勢に促されて成立したものである。回を重ねる三回、この現實情勢は、更に進展して、いま目に見る如き激しい姿を示してゐるのである。戦ひは經濟生活の全分野に浸透してゐる。我々はいま戦争即經濟、經濟即戦争といふも過言に非ざる事態に直面するに至つてゐる。日本經濟政策學會が生誕と同時に與へられた戰時的性格はいよいよ鮮明とならざるを得ない。以下の記述は會員四〇〇名を超えるこの大學會が、昨秋の京都に於ける大會を承け、一ケ年の滄桑をかたむけて世に問ふた成果の大略を描かんとするものである。

大會は十一月二十二日銀杏の黄葉の印象的な東京帝國大學經濟學部に開幕、理事會に引續いて第一日の報告は共通論題たる『大東亞共榮圈建設に關する諸問題』を繞つて繰りひろげられた。

- (一) 生活圈の展開に就いて 時子山常三郎氏
- (二) 共榮圈建設の可能性と現實性 高橋 次郎氏

- (三) 東亞共榮圈の地理學的考察 飯塚 浩二氏
- (四) 大東亞共榮圈纖維對策 井上 貞藏氏
- (五) 大東亞貿易の機構 藤井 茂氏
- (六) 東印度に於ける經營體の特質

—— 地方行政機構と企業の經營組織 目崎 憲司氏

これらの諸報告は第一日の午前午後にわたつた。一年前までは夢想だにせざりし大東亞共榮圈が、いままさに日本を中心とする主體的活動の場として雄大な規模を以て現實化されんとしつつある。時子山氏はかくの如き共榮圈が如何なる構造をもつかといふ問題を、生活圈の展開過程に於いて理論的に把握せんことを期せられ、次いで各報告者によつて共榮圈の資源的、地理的、交易的諸條件の具體的檢證並びにこれに伴ふ諸問題の解決策が明示的に或は示唆的に語られたのであるが、共榮圈の成否の鍵が、實はほかならぬ我が國自體の律動的な政治經濟のうちに求められねばならぬことについては、ほと一致した見解に達してゐたやうに思はれる。

この報告の終了後、夕刻より次の二つの公開講演がなされた。

- (一) 民族久遠の經濟 高田 保馬氏
- (二) 大東亞戰の見透 下村 宏氏

消 息

私はこの講演を開き洩したのであるが、翌日の報告會に於いて講演内容が屢々人々の話頭に上り、それが極めて感銘深きものであつたことを知つて、聴講せざりしことを非常に残念に思つた。

第二日は、部會毎に平行報告が行はれ、本學からも、山田雄三、阿部源一、天利長三の三氏が参加して他の報告者とともに秀れた勞作を發表した。同時平行報告といふ方式の缺點を補ふために報告終了後部會の座長が取り纏めてその内容を報告することは本會創立以來のよき慣例であるが、これによつて直接聴講できなかつた部會の様子も知り得るわけである。以下大熊信行氏(第一部)、渡邊信一氏(第二部高岡熊雄氏の代理)、谷口吉彦氏(第三部)、高垣寅次郎氏(第四部)の周到且つ熱心なる座長報告を指針として論點を紹介することとする。第一部會では、

- (一) 國民經濟政策と企業經營政策との論理的關係

松井辰之助氏

- (二) 第三經濟學の構想

小宮 孝氏

- (三) 國民生産力

山田 雄三氏

- (四) 國民經濟政策體系

酒井正三郎氏

の諸報告が行はれた。(一) 松井氏は主體的立場を強調するに

一 橋 論 叢 第十一卷 第一號

も不拘、企業の優位性の無視すべからざる所以を述べ、(二)に於いて小宮氏は純粹經濟學及び政治經濟學に對して第三の經濟學をゴットルに求めこれを以て『あらゆる時處を超えた生活』の科學なりと主張、(三)の報告は、スミスの分析的なる生産力の規定とリストの國民生産力への要求とを如何に綜合すべきかといふ問題を提出し、普通單に「生産力」と稱せられるものを、生産高、生産因、生産度に分ち、生産高 = 生産因 × 生産度の圖式を援用して、如何にすれば可能的生産力の科學的把握がなし得られるかを示唆、(四)の報告はゴットルの立場を前提として、政治的者一般から民族科學、政治科學、經濟科學がそれ／＼課題を指示され、この課題の解決に超主觀的な政策體系の成立すべき理由を述べた。この部會は恐らく最も活潑な討論の場所であつたであらう。各報告毎に録々たる經濟學者が相ついで質問の矢を放ち、應酬し、反駁し、座長大熊氏は質問の制限に苦慮しつゝ、自らも質問を抑へ難き狀態と見受けられた。こゝには明かに戰時經濟問題の理論的集中があつた。參會者の一人一人が眞剣に考慮しつゝあるところの同じ問題が、姿を變へ、衣を變へて登場し來つたのである。經濟學そのものの在り方が根本的に問はれるのである。國家と經濟の關係が論ぜられるので

ある。いま思ひ浮べるだけでも柴田敬、水谷一雄、内池廉吉、大野信三、宮田喜代藏、金子弘、氣賀健一、花戸龍藏、中山伊知郎、時子山常三郎等々の諸氏が發言してゐる。恐らく時間の餘裕があれば、參會者の全てが發言を求めたであらう。それは誠に緊張した姿であつた。

第二部會は農業經濟に關するものである。報告者及び題目は次の通りである。

(一) 大都市の戰時食糧政策と野菜自給圖 宮出 秀雄氏

(二) 中支蠶業の經濟問題 森 泰吉郎氏

(三) 十九世紀末葉以後の英國食糧經濟の分析 阿部源一氏

(四) 農業經濟學上の一問題 裕 正夫氏

(一)の宮出氏は例へば百萬以上の都市に於いて都市の周圍八里を野菜自給圖として、七〇—八〇パーセントの自給率を確保すべき方策を論じ、(二)は中支那の蠶糸業につき零細手工業的なるもの、産業資本型をなすもの、外觀のみ工場制をとるものに類別、全般的に支那蠶糸業の半植民地性半封建性を指摘するところあり、(三)阿部氏は、豊富且つ精巧な圖表を用ゐて、イギリスの食料消費、自給率その他を示し、それよりして今次大戰中の狀態を推定して比較的良好なものと結論し、(四)の

報告に於いては農業經濟學は一般理論經濟學と方法を同じくし、たゞ農業は土地所有制度に基く地代現象をもつ點で特異性があるに過ぎぬと論じた。これに對しては那須皓氏より、商工業を對象とする一般經濟學と、家計及び經營の分化せざる農業を對象とする農業經濟學との根本的差異を指摘、論争に至らんとしたが時間が迫つて中止された。

次に第三部會は谷口吉彦氏の司會の下に

(一) 運送費用に就いて

安部 隆一氏

(二) 日本勞働政策に於ける厚生施設の位置

三好豐太郎氏

(三) 生産企畫と工業經營比較制度

平栗 政吉氏

の三報告がなされた。(一)に於いては運送費用の經濟理論的研究が展開せられ、安部氏の結論によると運賃は企業經營の立場では價值増殖的と見られるが、國民經濟的にはむしろ失費に他ならず、従つて生産地と消費地の距離は可及的に短くすべしと主張せられたわけである。(二)に於いては、厚生施設の歴史的發展を省み、僱主の恩惠的なものから勞働組合の自立的なる施設へ、更に全體主義的なそれへと理念の上で變化し來れることを説き、更に厚生施設の態様を分類して資料を整理し、國家的助長の必要を強調するところあり、(三)の報告では、經

消 息

營内容に關する資料の任意的交換から出發した『經營比較』が、コンツェルンの統一原價計算に進展、更に部門別比較の段階を経て國家による綜合的經營比較にまで成長せることを、主としてドイツの實情によつて示した。

最後に第四部會は貨幣金融に關するものであるが、座長高垣寅次郎氏の説明にもあつた通り、報告者の數から言つて極めて淋しい會となつた。報告題目は左の二つに過ぎなかつたのである。

(一) 貨幣流通の要因

丹後愛二郎氏

(二) 中支の通貨政策

天利 長三氏

(一)の報告は所謂『グレッシャムの法則』を我が國の『撰り錢』の現象と同一なりとし、撰り錢の生ずる條件を求め、結局相對的な良(惡)貨性の存する場合にのみグレッシャム法則が作用すると述べ、(二)に於いては、支那の經濟が、軍票及び新法幣の流通圈、舊法幣經濟圈、及び兩者の入り亂れつゝある部面の三つに分れ、しかもそれらが相互に複雑微妙なる作用を及ぼしつゝあることを、浙江實業銀行その他の預金及び物價指數から實證的に検討するところがあつた。

なほ、總會の席上、二十數名に上る新會員の加入、會計報告

一橋論叢 第十一卷 第一號

の件が承認され、且つ明年度大會を神戸に開くことが決定されたことも附記しなければならぬ。終りに當番校の東京帝國大學經濟學部の方々が熱心に準備下され、滞りなく大會を終了せ

しめたことに對し感謝の意を表して、この記を終へることとする。
(木村元一)

本號執筆者紹介

山内得立氏	東京商科大学教授
馬場啓之助氏	東亞研究所所員
古川哲史氏	東京商科大学講師
藤井義夫氏	東京商科大学講師
吹田順助氏	東京商科大学教授
田上穰治氏	東京商科大学教授
木村元一氏	東京商科大学助教授